

## 「教育実習を終えて」

[私立中学校・高等学校 社会]

あっという間の 3 週間だった。最初に自己紹介のために初めて教壇の上に立った時に、「前からこんなにも生徒の顔が見えるのか。」と思ったのが印象として強く残っている。生徒一人ひとりの様子や態度をしっかりと把握できる立場にあるからこそ、それぞれの個性を理解し尊重した授業づくりを行わなければならないと感じた。人前で話すことに抵抗はなかったのだが、授業となるとその通りにはいかない。一人でただ内容を話し続けるのではなく、生徒を観察し理解度を図りながら授業を進める必要がある。理解度はもちろん、体育の後で疲弊しているクラス、1 時間目で眠たそうな生徒が多いクラスなど様々な状況を考慮する必要がある。世界史という科目の性質上、一方的な授業展開になりやすい。暗記だけの授業になってしまうと、なかなか内容を定着させることができない。なので、世界史を楽しんでいると感じてもらいたいというのが今回の実習における大きな課題の一つだった。用語の羅列になるのではなく、歴史の流れが分かるように因果関係に着目して説明することを心掛けた。また、使用するスライドに多く画像を入れ込んだ。視覚的に生徒の興味を引くためである。このような工夫の成果が出たのか、生徒から分かりやすいと言ってもらったこともあった。「先生の授業のおかげで世界史が好きになった。」という言葉が何よりも嬉しかった。

授業づくりにおいて、同じ教科の先生の授業を参観するのがとても勉強になった。進めている範囲にこだわらず、過去に学習した出来事や現在の世界の情勢と繋げて説明されていた。大きな歴史の流れの中の一部として学習させていたというのが印象に残った。

教師の仕事は授業づくりだけにとどまらない。担任を持つとクラスの運営を管理する必要がある。朝礼では連絡事項を正確に生徒に伝えなければならない。提出物の締め切り日や、提出状況をしっかりと把握しておかなければならない。だからといって、何でもかんでも担任がやればいいのかというわけではない。実習期間中、学校では文化祭が迫っていた。文化祭準備の時間になると、生徒たちが教壇に立ってクラスの催し物についての話し合いを仕切っていた。担任は口を挟むことはなかった。このように時には生徒の自主性を尊重し、委ねることも必要なのである。この線引きが難しいと感じた。

この実習では計 32 回の教壇実習を行ったが、それぞれの授業が生徒にとって一生に一度の授業なのである。自分が発した言葉を生徒はそのまま知識として蓄えていく。これを強く感じたのは、イスラム教の成立についての授業を行ったときである。このように世界史では現代の世界における一般常識のような内容を扱うことがある。それだけに教師の役割は重要である。プレッシャーを感じることもあったが、それと同時にやりがいを感じることもあった。この実習では教師としての大変さ、そしてやりがいを学ぶことができた。来年の春から教師になるので、この経験を糧に教育活動に取り組んでいきたい。